

哲學研究

第三百十號

第二十七卷
第一冊

歷史的世界の構造（上）

高山岩男

一

『世界史の理念』に於て、私は世界史に特殊的世界史と普遍的世界史とを區別し、それに應じて歴史的世界にも特殊的世界と普遍的世界（即ち世界史的世界）とを區別する必要があることを論じ、今日に於ては從來端的に世界史と考へられてきたヨーロッパ世界史は一つの特殊的世界史に轉換しつゝあり、従つてヨーロッパ世界は今日一つの歴史的世界に過ぎなくなつたことを主張した。私は現代に於て眞實の世界史が成立しつゝあると考へるのである。この意味で、從來の特殊的世界と現代の普遍的世界との間には、何らかその性格や構成に相違があると考へなければならぬ。歴史的世界はその本質上當然歴史的なものである。歴史的世界はそれ自身に歴史性をもつてゐる。世界史には系譜が存してゐる。そしてその系譜に應じて、歴史的世界には唯一的・一回的な、即ち個性的な特質が存してゐる筈である。今日、我々が近代世界と現代世界とを區別し、その間に根本的な相違を考へるのもこのためである。國家と世

界とはもと雙關的なものである。今日、我々が近代國家と現代國家とを對比せしめるのも、要するに歴史的世界の性格に相違が存するからに外ならない。同様のことは地中海世界についても、西洋世界についても、東亞の世界についても言はれるであらう。

このやうに、世界史上の歴史的世界はそれぞれ特有の個性を有するのであるが、併し翻つて考へてみるに、歴史的世界には歴史的世界としての共通な本質が存してゐなければならぬ。でなければ、我々が歴史的世界を言ふことは不可能であり、歴史的世界に歴史性を考へ、世界史に系譜を考へることは不可能である。地中海世界やヨーロッパが一つの歴史的世界であり、東亞が一つの歴史的世界であると言ふとき、そこには歴史的世界と言はるべき共通の本質が豫想せられてをり、それについての了解が既に前提せられてゐるといはなければならぬ。勿論、世界史上の歴史的世界はこのやうな一般的本質のみで成立するのではない。そこには互に他から區別せらるべき特殊な相違の面が存してゐる。世界史上の歴史的世界はこのやうな一般性と特殊性との、或は同相と異相との兩面の綜合として、始めて唯一的・一回的な個性的の世界となるのである。前者の面は歴史的世界のいはば必要條件に相當するものといふべく、後者の面はいはばその十分條件を満たすものといふべきであらう。我々は世界史の系譜の問題に立入るに先立ち、一般に歴史的世界といふものの構造を明かにしなければならぬ。

世界といふものは一般に空間と時間とを構造契機としてゐる。私は歴史的世界の空間的契機を地理と人種として捉へ、それらが歴史的世界に於て始めて單なる自然性を脱した文化的・社會的なものとなることを明かにし、歴史的世界の空間的契機には隨所に時間的契機が滲透してゐることを明かにした（『歴史の地理性と地理の歴史性』及び『人

種、民族、國民と歴史的世界』。そして進んで、歴史的世界の歴史性をなすと考へられる時間的契機の考察に進み、歴史的時間の種々相の中に隨所に空間的契機が滲透してゐることを明かにしたのである（『歴史的時間の諸相』）。歴史的世界の構造契機である空間と時間とは、このやうにして互に相即相入し合つてをり、重々無盡に滲透し合つてゐる。空間と時間とは世界に於て離し得ない内面的聯關をなしてゐる。世界といはれるものはこのやうな意味で、すべて空間と時間との綜合といふ構造をもつてゐるといへるであらう。併しながら空間と時間との綜合である世界には、單に構造契機の解明を以ては盡くし得ない世界自體としての獨自な本質が存してゐなければならぬ。そしてこの世界自體としての獨自な本質が、前述のやうに、世界史の系譜に關りなく世界としてもつ一般的な本質に外ならぬのである。このやうな意味で、歴史的世界の世界としてもつ獨自な一般的本質は如何なるものであるか。換言すれば歴史的世界の構造は如何なるものであるか。私は今まで歴史的世界といふ概念を自明のもの如くに用ひてきた。併しそれは嚴密には如何に規定せらるべきものであるか。

歴史的世界の構造を明かにするに際し、先づヨーロッパを例として考察を進めてみよう。それはヨーロッパが典型的な歴史的世界であることは、何人にも異論がないと思ふからである。従來、ヨーロッパの世界史は端的に世界史そのものと考へられてきた。今日に於ける世界史の轉換は、もはやこのやうな素材な世界史の理念を許さなくなつたのであるが、なほヨーロッパが勝義に於ける歴史的世界の構造を有した事實は、今日と雖も何人も否認できないであらう。では、ヨーロッパは如何なる意味で歴史的世界と考へられるのであるか。

歴史的世界としてのヨーロッパが自然地理學の意味に於けるヨーロッパ大陸でないことは言ふまでもない。歴史的

世界は單なる地理的世界ではない。或る歴史家の言ふやうに、ヨーロッパといふものはオーストラリアやアフリカのやうな自然的統一を意味してゐるものではない。ヨーロッパは長い歴史的發展と精神的進展の結果として形成せられたものである。ヨーロッパといふものはいはば歴史的统一であり精神的統一である。この統一性の基礎をなすものは精神的文化である。而もこの文化に於けるヨーロッパの統一性も、決してヨーロッパ史の出発點ではなく、一千年の間達すべく努力せられて而も十全には達せられない目標なのである (Dawson, *The Making of Europe. An Introduction to the History of European Unity*. 1932)。嘗てランケが自分の思想で最も優れた完全に正しいと誇つた思想は、實にヨーロッパを一つの統一的世界と見るといふ思想であつた。彼はヨーロッパのキリスト教諸民族の集團は、いはば一個の國家のやうな全體として考察せらるべきであり、もしさうでないならば、西洋世界と東洋世界との間に存する巨大な相違も、ゲルマン諸民族とローマ諸民族との間に存する緊密な類似も、正當には理解でき難いことを強調した (Ranke, *Über die Epochen der neueren Geschichte*. 第十三講)。では、歴史的世界としてのヨーロッパの統一性は、如何なる基礎から成立したものであるか。これについてはランケ以來、ローマ帝國の建設、世界法としてのローマ法の成立、キリスト教の世界宗教化が擧げられ、更にゲルマン諸民族の侵寇と、それに由來するローマのゲルマン化とゲルマン諸民族の都會化、いはゆるローマ風・ゲルマン風諸民族の成立が數へられることは、一般の通説となつてゐる。イェリングがローマは三度世界を征服した、一度は軍隊により、二度は宗教により、三度は法律によつて、と言ふたことは、廣く人口に膾炙してゐるところである (Jhering, *Geist des römischen Rechts* 1852-08)。要するに、ヨーロッパ世界の統一性はローマ帝國の建設による政治的統一を根源的基礎とし、進んでロー

マ法を中心とするギリシヤ・ローマ的な文化的統一と、キリスト教による宗教的・精神的統一とを基發點とすることによつて成立し、次にゲルマン民族のローマ化とローマ民族のゲルマン化とを経て中世に至り、こゝに始めてヨーロッパの歴史的世界としての統一性が一應達せられたと考へることができらう。ランケはこれを「ヨーロッパ的共同體」(das europäische Gemeinwesen)と稱した。

ヨーロッパの歴史的世界としての統一性がこのやうなものであるとするならば、それは明瞭に單なる地理的・地域的統一ではなくして歴史的统一であり、而もそれは歴史の出發點ではなくて到達點であり、與へられたものでなくて達せられたものであると言はなければならぬ。ヨーロッパの統一性は文字通り歴史的统一であり、生成せる統一である。言はば靜的统一でなく動的統一である。ヨーロッパの完全な統一性はいつ到達せられたといふのでもなく、一應いはゆる中世のキリスト教的統一によつて到達せられた如く見えるが、それもまた東西に分かれて完全な統一といふものは存しない。けれども、ヨーロッパの歴史には常にヨーロッパ的な統一性が根柢を流れてゐる。いはゆるヨーロッパ的共同體を離れてヨーロッパの歴史が正當に理解でき難いことは明瞭な事實である。ローマ帝國の思想は中世にも流れて、ゲルマン民族の上に神聖ローマ帝國を建設せしめ、更にビザンチン帝國にもこの帝國思想は存續して行つた。ラテン語は諸民族の國語の上に世界語として通用し、教會はなほ世界教會として根本的には共通のキリスト教教理を有してゐたのである。歴史的世界としてのヨーロッパの統一性は即ち靜的统一でなく動的統一であると考へなければならぬ。更に我々はこの統一性が政治的統一であるか、文化的統一であるか、宗教的統一であるか、經濟的統一であるかを、それぞれの觀點から綿密に考へる必要があるであらう。勿論、歴史的世界に於ては政治、文化、宗

教、經濟等、いはゆる歴史的勢力は單にばらばらのものでなく、常に一定の内面的聯關を形造つてゐる。併しこの内面聯關の様式は常に同一のものとは言はれない。例へば、中世ヨーロッパが宗教や教會を中心とする聯關の様式を形成してゐると見られるのに對しては、近世ヨーロッパは寧ろ文化や經濟を核心とする聯關の様式を形成してゐると考へ得るであらう。政治、文化、宗教、經濟等の諸勢力が如何なる仕方で結合し、何を中心として聯關が結成せられるかに、歴史的世界の個性も世界史の諸時代の特質も見られるのである。

併し更に我々はこのやうな歴史的統一性が、その基底に異質的、多様性をもつてゐる事實を深く注意する必要がある。ローマ帝國の歴史的地位を如何に解するかによつてヨーロッパ世界史の考へ方が分かれ、いはゆる地中海世界に一個の世界史を考へる見方に歸着するか（マイヤー）、それにヨーロッパ世界史の歴史か玄關か位の意義しか認めないか（ランケ）の相違が生ずるのであるが、とにかくヨーロッパ世界を構成する文化的・宗教的・民族的要素に異質的なものが存し、ヨーロッパの統一性がいはゆる東洋と西洋との交錯、結合、融合の過程から成立したことは明瞭な事實である。特にいはゆるローマ風・ゲルマン風諸民族が成立し、ユダヤ教より轉化したキリスト教がそれらの精神的統一性を形成し、かくてヨーロッパ的共同體が東洋と西洋との異質性の上に、いはば第三の新しきものとして創造せられたことは、注意せらるべき重要な事實である。それ故、この統一性は常に根柢に異質性を藏してゐるのであり、この異質性はローマ帝國の東西への分裂となつて現れ、或はキリスト教教會の東西への分裂となつて現れ、それに應じてそれぞれ特有な様式をもつ文化の形成となつて現れてくる。我々が今日勝義に於て西洋と稱するものは、だいたいに於て西ローマ帝國の後身に形成發展せられたものであり、キリスト教もゲルマン諸民族の精神生活の内部から變

質發展せられた歴史的なものと考へることができるのである。このやうに中世ヨーロッパに既に二つの異質的な世界があり、二つの異なつた宗教や文化が存するのであるが、無論その根柢にはやはり一つの共同性が流れてをり、キリスト教の統一文化やローマの帝國理念は等しく支配してゐるのである。ヨーロッパには多くの人種と民族と國民とが存する。ローマ帝國の崩壊後、遂にそれに類するやうな強力な帝國的統一は成立しなかつた。政治的にヨーロッパは却つて分散化の傾向を辿つて行つた。けれども、ヨーロッパにはなほ政治的理念や宗教的・文化的理想による統一性が存続し、ヨーロッパは歴史的世界として緊密な統一性を保持したのである。

このやうに、歴史的世界としてのヨーロッパの統一性は、これを中世の如き統一的世界性の明瞭な時代に見ても、簡単に考へられるやうな單一性ではない。いはゆる國民國家が成立し、國民文化の發展せる近世に於ては、このことはなほ更明かである。近世に入つてからヨーロッパは益々明瞭な形を以て、それぞれ國民的な政治・經濟・法律・言語・文化・宗教をもつ國家が、互に緊密な統一の聯關をなす世界となるに至つた。いはゆるヨーロッパ的共同體は決して單純な統一性を意味するものではあり得ない。換言すれば、歴史的世界といふものは實は單純な統一性のみで構成せられるものではないのである。歴史的世界の根柢には同時に分散性や多様性が存してゐるのでなければならぬ。統一性と分散性、單一性と多様性との綜合に、始めて歴史的世界といはれるものが成立するのである。世界は決して一個の民族や國民の連續的擴張といふ構造をもつものではない。國家は如何にその版圖を擴大しても世界といふものにはならない。いはゆる帝國は單にそのまゝでは歴史的世界といふものではない。それは世界史が國史の延長や擴大でないのと同様である。世界史とは大きな國史を意味するものではない。歴史的世界とは民族と民族、或は國家と國

家との間に、それらを包越して存立してゐる別個の統一體である。而も民族はこの歴史的世界に於て民族となり、國家はこの歴史的世界に於て國家となるのである。無論、民族と民族、國家と國家との間に滙てしない多様性や分散性が存し、殆ど何らの統一性も共同性も存しないならば、歴史的世界は存しないと言はなければならぬ。ヨーロッパ世界がローマ帝國の統一を出發點として歴史的に成立してきた所以はこゝにある。世界史とは單に無關係な國史の集積ではない。それ故、單なる等質的一様性も單なる異質的多様性も、共に未だ歴史的世界の構造を規定するものではない。多様性の中に於ける、一様性、分散性を通じて貫く統一性が、始めて歴史的世界の構造を規定するのである。民族的・國民的な多様性、風土的・文化的な多様性を通じて、而もそこに何らかの形の共同的一様性が存するとき、そこに始めて歴史的世界が存するのである。單なる共同的普遍性も特殊の相違性も未だ歴史的世界を成立せしめない。一と多、同と異との綜合の構造が見られるとき、そこに歴史的世界が存立してゐるのである。このやうな意味で歴史的世界は動的な統一體であり、歴史的な統一體である。ヨーロッパの世界はこのやうな構造をもつてゐる。否、我々はヨーロッパ的世界の考察から、このやうな歴史的世界の構造一般を知り得るのである。

歴史的世界とはこのやうに單なる特殊でも特殊の集積でもなく、さりとて特殊を貫通する普遍のみをいふものでもなく、特殊と普遍とが交錯しつゝ自己自身を維持してゐる全體に外ならぬのである。世界史の對象となるものは國史の對象たる特殊な國家や國民ではない。世界史の對象となるものは特殊な國家や國民相互の間を連ねてゐる普遍的聯關である。併しこのやうな普遍的聯關は特殊な國家や國民を離れて、それ自體に於て靜的な既成的な存在性をもつものではない。世界史の對象となる世界とは人類とか人類社會とかいふ非現實的なものではない。世界史の對象は現實的

な普遍的聯關であつて、而もこの普遍的聯關そのものが歴史的に成立し建設せられるのであり、それは特殊な國家や國民の交渉の間に存する動的なものである。而も國家や國民はこの普遍的聯關の間に於て始めて國家や國民となるのであつて、この意味でそれは特殊を特殊たらしめる高次元の普遍であると言はなければならぬ。歴史的の世界とはこのやうな構造をもつのである。

併しながら歴史的の世界は端的にこのやうな構造をもつものと規定せられるが、その歴史的の世界としての統一性の自覺は、なほ他の歴史的の世界に對する對抗の中に成立することが注意せられなければならぬ。このことはまたヨーロッパ世界の歴史が明かに示してゐる。ランケは嘗て十字軍が東洋に對して全ヨーロッパの強い統一性の自覺を成立せしめたことを注意した。このやうな事態はひとり十字軍のみには限らないであらう。イスラムに對する對立意識も同様の感情を喚起したものと思はれる。現今の西洋史學は從來の解釋よりもビザンチン帝國の西洋に對する強度の異質性を説く傾向にあるやうであり、ビザンチン帝國にイスラム世界と西洋世界との媒介者の役割を見出すやうである (Dawson, *op. cit.* Part II)。このことは今日ロシアを特に非ヨーロッパ的な面に於て強調する見解 (E. Brandenburg, *Europa und die Welt*. 1937) を、ロンドンでヨーロッパでもなく、寧ろ兩者の中間たる *Eurasia* として規定する見解 (Vernadskij, *A History of Russia*. 1929) と一脈通するものをもつてあつて、注目すべき見解であると言はなければならぬ。このやうに、ヨーロッパが非ヨーロッパ或はヨーロッパ外に對して共同性を自覺するといふことは、ヨーロッパが一個の特殊の世界であることの意識が成立することを意味するのであつて、歴史的の世界は特殊の世界として却つてその統一の意識に達するのである。歴史的の世界は常に一面に於て特殊の世界である。

このことは歴史的な世界である以上は本來的な事柄であつて、歴史的世界は時間上特殊な世界であると同時に、空間上もまた特殊な世界なのである。勿論、歴史的世界の特殊性の自覺には、その半面に既に普遍的世界の意識が伴つてきてゐる。十字軍に於て全ヨーロッパの統一性の自覺が成立したことを説いたランケは、同時にその間接的な結果として、而もより大なる意義をもつものとして、東洋に對する強い交通の衝動を喚び起したことを注意してゐる。特殊性の自覺は同時に普遍性の目覺めである。普遍的世界或は世界史的世界の成立には、却つてその半面に特殊的世界の確立が伴ふと言はなければならぬ。この面から見ても、歴史的世界は多様性に於ける一様性、否寧ろ反對に於ける統一といふ緊張的統一を、その一般的な構造とすると考へることができるのである。

二

一般に最も典型的な歴史的世界と認められるヨーロッパをとつて考察しても、右に論じたやうに、その世界の意義や構造は決して單純に考へられるやうなものでなく、寧ろ極めて複雑な意義と構造をもつてゐるのである。けれども、我々は右の考察から、凡そ歴史的世界といふものは典型的には次のやうな構造をもつことを知り得たと思ふ。即ち、第一に、歴史的世界は統一性をもたなければならぬが、その統一性は單なる自然的・地理的な統一性ではなく、歴史的・精神的な統一性であること。第二に、併し歴史的世界は單なる同質的統一性のみで成立するものでなく、同時に異質的多様性を根柢に有すること。無論、異質的多様性のみ存するところに歴史的世界の存すべき道理はない。それ故、第三に、歴史的世界は異質的多様性の中に同質的統一性が貫通してゐるところにあり、歴史的世界は一般に

多と一、異と同との綜合、或は對立と統一との綜合といふ構造をもつことである。私は一應これを以て歴史的世界の典型的な構造と規定しておかうと思ふ。このやうな構造をもつ世界はヨーロッパ以外に存しないであらうか。次にこのことを少しく考察してみなければならぬ。

嘗て論及したやうに、印度は一つの歴史的世界と見ることができらう。土地の高低や溫度湿度の多様さ、それに伴ふ動植物の分布の變化など、その風土的・地理的條件から、印度は實に民俗學的博物館とも評し得るほど、人種、言語、慣習等に於て分散的であると云はれる。これが印度が統一國家を形成したことなく、紀元前四世紀に百十八の王國が存したと言はれるほど、政治的統一性が稀薄である根據をなすのである。大英帝國の政治的支配下にある今日でさへ、なほ本國、保護國を合して約七百の國が存してゐる状態である。それ故、印度は政治上は著しく分散的であると云はなければならぬのであるが、併し印度にはこの分散性の根柢に、政治より遙かに強力な統一性が存してゐる。それが印度教といふ宗教と儀式とによる統一性である。この宗教によつて裏づけられたカストの制度は、印度教の支配する領域の全體に普及してをり、その信者は凡て婆羅門を尊敬し、ヴェーダの權威を疑ふ者は存しない。ヴェーダやシヴァの神々は到る所で尊崇せられ、聖地から聖地へ遊行する敬虔な順禮者は、北方の雪の中でも、南方の沙漠の中でも、共に同様な心易き氣分に浸ることができらう。こゝに於ては今でもマハーバラタやラマヤナの物語で感ぜられたと同様の感情に浸り得ると云ふ (V. A. Smith, *The Oxford History of India* 1922.)。

もしこのやうに觀察することができらうならば、印度は血統や皮膚の色や、言語、習俗、政治などの涯てしない差別を超越して、深い宗教的統一性をもつ一つの歴史的世界であると考へ得るであらう。そこには極めて稀薄ではあるが、

なほ多様性の中の統一性が存してゐる。印度は主として宗教的な結合を基礎とする世界であると言へる。勿論、印度にも印度教以外の種々な宗教が現存してをり、従つて宗教的に單一的な統一性をもつとは考へられない。併しその場合には、種々の宗教を越えて印度的な文化的心情の共通性が見られるのである。かつまた、印度的世界の範域は歴史上種々に變化してをり、特に西北の地域を通じて古來異質的な文化圏との接觸が行はれてゐる。併し印度は決して單なる自然地理的統一ではなく、そこには宗教を中心とした文化上の統一性が根柢に存続してゐて、微弱ながらも一個の歴史的世界たる資格をもつと考へることができらるであらう。そしてこのやうな歴史的世界を想定しなければ、アレキサンダー以來の東西文化の交流も、いはゆる西域を通じての支那との交渉も、眞實にその意義を理解することは難かしいであらうと思ふ。

支那は印度にまして歴史的世界の構造を明示してゐる。こゝに歴史的世界としての支那を考へる場合には、單に狭く支那本土に限らず、滿洲、蒙古、西藏等の周邊諸地域を包含した廣い大陸の地域を考へることが必要である。支那は言ふまでもなく黄河上流の地域に漢民族が國家を建設して以來、その版圖も漸次擴大せられて屢々大帝國を建設したのであるが、それは必ずしも漢民族を主とするものではなく、異民族が強力な對抗勢力をなしたり、中原の主權を確立して帝國を建設したことも度々存するのである。遂に金や元・清の如きその大なるものであつた。支那本土は元々ヨーロッパに匹敵する程の廣袤をもつ地域であり、南船北馬と言はれる風土上の相違が存する外、自然地理的條件は各所に相當強度の封鎖性をもつ諸地域を構成して、實質上單一な政治的統一性が達せられることは極めて困難であつた。支那は古來より今日の我々が國家の概念の下に理解するやうな國家ではない。そしてまた支那はこのやうな意味

の國家たることを意圖したことも理想としたこともない。支那は事實としても理想に於ても天下であつた。更に周邊諸民族を入れ、ば、その間に人種上の相違は勿論、言語・習俗・社會・制度上の相違が存して、それぞれ何らかの形に於ける國家的な組織をもち、支那を中心とする大陸の世界には政治的・文化的に著しき多様性や分散性が存してゐる。併しそれらの中には常に政治上も密接な交渉が存し、決して無關係な並存の状態が存したのではない。漢代に於ける匈奴との關係、南北朝より唐にかけての北突厥との交渉、北宋の遼・金・西夏に對する關係、南宋の元に對する交渉などに見られるやうに、異民族間の政治的・關係は極めて重要な意味をもつものであつた。こゝにこの大陸世界が一つの歴史的世界である所以がある。支那を中心とする大陸世界は、そこに於て多くの國家が或は交渉し或は對立し或は統一し、中原の覇を争つて興亡盛衰の歴史を繰り返した歴史的世界であつたと言へる。そこにはどうしても一個の世界史があると考へなければならぬ。それは決して單なる自然的・地理的な空間ではない。立派に一つの政治的な統一機關をもつ歴史的世界であつたと考へてよい。のみならず、この世界を歴史的世界たらしめてゐる更に強度の統一性は、實は文化的・精神的な統一性であつたと思ふ。

言語が時代によつて變化を來し、同時代でも地域によつて變化を含むことは、何處にも見られる一般的現象である。支那の如き廣い地域に於て地方的に發音が異なり、同一言語でも會話を以ては通じないやうな現象が存することは何ら不思議ではない。併し支那の場合には、言語を音標文字を以て現す場合とは餘程異なる特殊な條件が働いてきてゐる。それは漢字が根本に於て象形文字であつて、たとへ發音は異なつても、文字の上では意味が同一であつて、この點から言語の共同性の濃度は極めて高いといふ條件である。漢字のもつこの特質はやがて何千何百年を經過して

も、文明や思想になほ不變な同一性を持續せしめるに至り、更に漢字といふ言語の支配するところ、凡て同一の民族的心情を形成してくるのである。この點に於て、支那はヨーロッパなどに比して遙かに強度の文化的・精神的統一性をもつと評してよい。古來、支那がヨーロッパのやうな歴史的世界と考へられるよりは、寧ろ大きな國家であるかの如く考へられて來た一つの根據は、恐らくこゝにあるであらう。漢字はひとり漢民族に限らず、中原に主權を確立した異民族の間にも普及するに至つた。無論、これらの異民族も固有の言語は存續せしめてゐるのであつて、漢語は言はば一つの國際的な世界語の意義を有したのである。それ故、支那を中心とするこの世界には、言語に基く文化的・精神的な統一性が存してゐると見ることが出来る。これと同様のことは律令といふ法律制度にも見られ、更にその一つの根據をなしてゐる王道政治の理想にも見られる。このやうな意味で、この世界にはヨーロッパに匹敵する文化的・精神的統一性が存するのであつて、立派に一つの歴史的世界であると言はなければならぬ。

このやうな支那の政治的・文化的な統一的世界性は、秦漢の時代に一應達成せられ、これが支那の世界史の出發點を形造つてゐると思はれる。秦に於ける天下の平定は、ヨーロッパに於けるローマ帝國の建設と同様な意味で、支那の歴史的世界に統一性を與へた出發點と見ることができ、漢に於ける王道政治の理想は、ヨーロッパに於けるキリスト教と同様に、また支那の歴史的世界の統一性を強化したものと見ることができであらう。周末、春秋戰國時代に於ける諸侯の對立鬭争は、支那を一つの歴史的世界たらしめる消極的な條件を提出したのであるが、その領域は未だ狭く、思想文物の華やかな發展にも、未だこの世界に積極的な統一性を與へるほどに有力なものも存しなかつた。秦による天下の政治的統一を以て始めて、このやうな意味の積極的統一が現れたのである。秦は中央集權的な郡縣の制

度をもつて政治的統一を實現した帝國である。漢に至つて封建の制度も併用せられたが、政治的統一は失はれず、却つて儒教が正統の政治・倫理の思想として確定せられ、國家天下の道義政治の理想が掲げられて、遂にこれが他の政治思想の存在するにも拘らず、常に支那の天下を貫通する強固な傳統的理想となるに至つたのである。秦の政治的統一と漢の文化的統一とがなくては、支那の歴史的世界は成立しなかつたと考へ得るのであつて、これはヨーロッパの世界に於けるローマ帝國とキリスト教とに比すべく、それ以來中原に覇を唱へた民族には交替があり、その文化の發展にも他の民族文化が流入し、唐の如き西域を通じて印度・ペルシヤ・アラビヤ・西洋の諸文化を混入した一種の國際的な世界文化さへ形成するに至つたのであるが、なほ依然として支那風の性格を維持し發揮したのである。支那の本土と周邊とを包む東亞大陸の世界は、一つの動的統一性、生成的統一性をもつ歴史的世界である。そこには立派に一つの世界史が存すると言はなければならぬ。

支那とその周邊を包む東亞の大陸は一つの世界史をもつ歴史的世界であるが、無論その世界の性格にはヨーロッパの世界と異なつたものが存してゐる。例へば、そこにはキリスト教のやうな宗教的統一性はない。存するものは儒教的な倫理的統一性である。またヨーロッパには中世にラテン語が世界語として通用したが、前述の漢字といふやうな文字に基く特殊な統一性は見られない。更にヨーロッパの近世に現れたやうな國民國家の形成もこゝには見られない。その他種々な性格上の相違が列擧せられるであらう。併しこのやうな事情は、特殊な歴史的世界の特殊性を現すものであつて、歴史的世界の存否を規定する根據となるものではなく、寧ろ却つて多くの特殊な歴史的世界の存在と多くの特殊の世界史の存在とを認識せしめる積極的根據となるのである。歴史的世界は他の歴史的世界に對立す

るとき、その統一性と特殊性とを自覺するものであつた。ヨーロッパに於ては十字軍がその大きな事件であると考へられた。支那の大陸世界に於てもこのやうな事情は同一である筈である。けれども、支那の世界に於てはこの點に極めて主觀的な觀念が長く持續し、やゝ違つた歴史的事情が成立してゐる。それがいはゆる中華或は中國の思想であつて、このやうな思想の支配した結果、支那からも眞實の世界史の理念が成立し得なかつたと思はれるのである。

支那に於て自國を中華や中國と稱し、外國を東夷・南蠻・西戎・北狄などと稱したのは、かなり古くからのやうである。自國を稱揚して他國を卑しむ風は、何も支那に限らず、或る程度までは何處にも見られる現象であるが、支那に於てこの態度は特別に發達して強い傳統をなしてきてゐる。これも元來は他民族に接して言語・風俗・制度などを異にするところから生じた差別感を基礎とするもので、必ずしも始めから價值上の差別意識を基礎としたものではないであらう。併し中華といふには、そこに支那こそ天下に於て最も文化の發達せる中央の國であるといふ意識が存してゐる。これは更に轉じて中國人を以て道德性の高き人間であり、夷狄は禽獸にも比せらるべき道德性の缺乏せる人間といふ觀念にまで發展した。即ち、中華思想は單なる地理的・自然的條件に基く思想でなく、文化的・道德的な評價を含む主觀的な思想となるに至つた。この思想的態度は歴史記載の仕方にも反映して、堂々たる獨立國をも東夷傳とか北狄傳とかに入れる態度となり、政治外交に反映しては、外國使節の通交も朝貢と稱して、自國と對等の國家的交際を認めぬ如き態度となるに至つたのである。この思想的態度は一方に於て保守排外の傾向を産み出すと同時に、他方に於ては中國の文化威風を天下に布くものとして開放博愛の傾向をも産み出したと思はれる（那波利貞「中華思想」岩波講座東洋思潮）。とにかく、中華思想は支那に於て特殊な意義をもつて發展したのである。併しこのやうな主觀

的かつ獨斷的な觀念が、第三者よりそのままに是認せられるわけではない。中華思想はもと歴史的世界の存在に由因する思想であるが、同時にまた歴史的世界を否認するに至る思想である。早く歴史を尊重して歴史の編纂を試みた支那が、獨自な歴史の觀念をもちながら、事實を倫理的に批判する主觀主義を脱しなかつたやうに、この中華思想もまた支那の歴史記載に主觀主義的傾向を與へてゐる。我々はこのやうな主觀性を脱するとき、初めて客觀的な歴史的世界の理念に達し得るのであつて、いはゆる東洋史はこのやうな歴史的世界の理念に立脚して、眞に正しい支那の歴史の把握に到達し得るのではないかと思ふ。そしてこのやうな中華思想の主觀的獨斷を否認なしに自覺せしめるものが、ヨーロッパ世界との接觸に發する近代世界史の事實、更に今日の世界史の轉換に外ならないのである。これと相似て、世界史と言へばヨーロッパの世界史を考へた西洋近代の思想にも、何らかの形に於てヨーロッパ的な中華思想が存したと評することができよう。このやうなヨーロッパ的中華思想を事實的に動搖せしめてゐるのが、屢々述べたやうに今日に於ける世界史の轉換に外ならぬのである。

右に論じたやうに、ヨーロッパを代表的な歴史的世界と考へて、そこから歴史的世界の一般的構造を取り出すとき、我々はこの一般的構造をもつ歴史的世界は、右に述べた東亞大陸を始め他にも存することを認めなければならぬと思ふ。これと同様の手續きを例へば支那を典型として逆に試みても、結局は同じ結論に到達するのである。勿論、歴史的世界はそれぞれ獨自な性格をもつてゐる。歴史的世界は必ず個性的である。併しそれは歴史的世界の特殊性を現すものであつて、決してその一般的構造を否認せしめる根拠となるものではない。歴史的世界は一般的構造と特殊の性格とを有して個性的な歴史的世界となる。そしてこのやうな歴史的世界は過去に於て多數存在したのであり、こ

れが内面的な聯關を成して共通の時代を形成してゐるのは、ヨーロッパの海外發展以後であり、特に十八九世紀である。現代に於ては嘗てのやうに分散的な世界の存続は許されなく、歴史的世界は普遍的な世界史的世界を形造るに至つた。併し今日のこの世界史的世界といへども、歴史的世界である以上、右に述べたと同様の構造をもつことには少しも變りがないのである。

三

歴史を動かす力は如何なるものであらうか。嘗てブルツクハルトは國家・宗教・文化の三つを歴史を動かす勢力と見、三者相互の制約關係を考察しようとして試みた (*J. Burckhardt, Weltgeschichtliche Betrachtungen, 1905.*)。歴史を動かす勢力をこの三つに止めることは疑問が存し、經濟を更に附け加へなければならぬことは、今日に於てはもはや問題が存しないと思ふ。併し、國家・宗教・文化・經濟の四つの勢力が、歴史の中に如何なる關係をもつて作用するかは、極めて難解な問題をなすのである。そしてこれらの間に一義的な法則性が見出されるやうな規定關係の存しないことは、ブルツクハルトの考察そのものが既に示してゐるところであると思ふ。併し歴史の哲學的考察はこれらの間に一定の法則的關係を見出さうと努力してきてゐるのであつて、普通、宗教史觀とか經濟史觀とか稱せられ、政治史とか文化史とか稱せられるものは、このやうな努力の結果提出せられた史觀に外ならないのである。これら四つの史觀は上述の四つの勢力の何れかに根源的な優位性を置き、それを基礎として歴史經過の全體を統一的に考察しようとするものである。併し私の考へるところによれば、これら四つの勢力が如何なる聯關を構成するかは、歴史的

世界によつて異なり、更に歴史的世界の時代によつても異なつてゐる。歴史的世界の特殊性や時代の特殊性は、實はこれらの勢力が如何なる仕方で結合してゐるかに由来すると思はれるのである。例へば、ヨーロッパの中世にキリスト教が基礎的な勢力をなしてゐると考へられるならば、これに對し支那にはこのやうな現象は見られず、寧ろ王道政治の倫理思想が基礎的な勢力をなしてゐると見ることが出来る。そしてヨーロッパの近世に至れば宗教の勢力は漸次退潮を示し、これに代つて經濟が基礎的な勢力となつてきてゐると考へられる。然るに支那に於てはこのやうな現象は見られないのである。我が國に於ては中世に佛教が基礎的勢力として支配し、漸次近世に進むに従つて倫理と經濟とが基礎的勢力となるに至つたと見られるであらう。このやうに、萬代を通じて變らず、何處の世界にも一律平等に妥當するやうな、四つの勢力間の法則的關係といふものは存しない。宗教史觀も經濟史觀もそれぞれ或る時代の歴史的世界の特質を捉へてはゐる。ヨーロッパに於て宗教史觀が中世に淵源し、經濟史觀が近世に成立してゐることは、決して偶然な事柄ではなく、時代の特質と内面的に結びついてゐる、けれども、それを萬代を通じて凡ゆる世界を通じて變らぬ永遠的・一般的原理とするとき、それは特殊性をそのまま普遍性となし、部分的原理をそのまま全體的原理に擴げたものとして、明白に誤つた歴史思想となるのである。史觀そのものが既に歴史性をもつ。非歴史的な史觀の原理の如きものはあり得ないのである。

このやうに、凡ゆる歴史的世界と時代とを通じて妥當する一般的史觀の如きものはなく、歴史的世界も時代も他のより高き一般の原理から演繹的に説明し得ない**原本的個性**を有するのである。歴史的個性はそれ自體に於て根源的なものであつて、非歴史的な一般の原理から導出せられるものではない。これと同様に、國家・宗教・文化・經濟等の

諸勢力の間には、一が他から規定せられる決定的關係はなく、これらの歴史的勢力はそれぞれ他から導出されない根源性を持ち、而も世界により時代によつて合理的に説明し得ない獨自な聯關をなしてゐるのである。政治も宗教も文化も經濟も、人間の生活にとつては根源的な意義をもつて存立する。それらは人間生活の開始と共に古く、また人間生活の存続する限り存在するであらう。と共に、それらは單獨で無關係のまゝに存在するのでなく、人間生活に於て離し得ない内面的聯關を構成して存在する。そしてこの内面的聯關の推移變動に歴史の發展が行はれ、歴史の發展につれて内面的聯關の仕方は異なるのである。例へば、宗教といふものは政治・文化・經濟からその成立や存在を説明し得ない根源的なものである。それは一面に於て現世的地上的な生活を否定し超越しようとする要求を藏するものである。が、宗教はまた他面に於て必ず政治・文化・經濟と結びつき、或は自ら教團を組織して特殊な政治・文化・經濟を形成し、或は教團外の政治・文化・經濟に内面的な指導性を及ぼさうとする。そしてこの宗教と政治・文化・經濟等との連繋が、世界により時代によつて同じでなく、その相違に世界や時代の相違が見られるのである。このことはキリスト教や佛教の歴史を考察するとき極めて明瞭である。佛教も印度、支那、日本に於て、政治・文化・經濟との連繋の仕方は違つてゐる。日本の佛教に於てもこの連繋の仕方は、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、江戸時代等で違つてゐる。宗教に就いて見られるこのやうな本質と現象は、宗教以外の他の諸勢力に就いても同様に見られるのである。宗教・政治・文化・經濟の諸勢力は互に根源的な自律性をもつものでありながら、なほ他との結合を要求するものであり、四者は重々無盡に相互媒介の聯關をなして現存するのである。それぞれ他から導き出し得ない自律的根源性を持ちながら、而も他との結合なくしては現存し得ないといふ關係、こゝに歴史的現實の微妙なる構造が存し

てゐる。相即相入を基礎原理とする法界縁起は、遠い神祕な法界の姿ではなく、歴史的な事の世界の如實の姿に外ならない。而もこの四つの勢力の内面的聯關が、本來動的な聯關として、自己自身の内部から動くところに、生滅成壞の歴史的運動が成立するのである。歴史を動かす力はこれらの諸勢力の聯關そのものにある。聯關が内面的な統一を構成して一定の様式を成すところに時代が見られ、聯關が内面的統一を失つて壞れ行くとき時代が推移する。我々はこの場合、何れかの勢力が中心の位置を占めて、聯關の全體に一定の様式を形成することを注意しなければならぬ。こゝに時代といふものの特殊性や唯一性があり、引いて歴史的世界の個性や、その歴史性の成立する根據が存するのである。

併しながら何れかの勢力が中心をなすといふことは、その勢力のみがいはゆる下層建築をなし、他の勢力はその上に構築せられた上層建築をなすといふことを意味するのではない。今日の我々は概念上、政治・宗教・文化・經濟を嚴密に區別して考へてゐる。換言すれば、今日の我々は互に他から區別せられた政治・宗教・文化・經濟の概念をもつてゐる。けれども、それは歴史的現實の中にこれらの概念が意味するやうな純粹のもの、即ち純粹政治・純粹宗教・純粹文化・純粹經濟の如きものが、そのままの形で現存するといふことを意味するのであつてはならぬ。現實には凡て純粹なるものは存しない。現實は理論的概念ではない。例へば政治といふものをとつてみるに、政治には何らかの形で宗教的なものが常に結びついてゐる。凡そ何らかの形の宗教性をもたぬ政治といふものは歴史的世界には存しない。古代に於て宗教・祭祀が政治に結びついてゐたことは、歴史的世界の隨所に見られる現象であり、政治的權威が單に地上的な權力といふものでなく、神聖な權威の意義をもつことは普く見られるところである。このことは凡

を政治的權威といふものの一つの本質をなしてゐると言つてよい。支那に於て天子の觀念は天命を受けるといふところに考へられた。この場合には宗教的權威が天命に存してゐる。政治の善惡に自然の祥瑞や災異が伴ふといふ觀念は、このやうな天子の觀念が基礎をなしてゐる。集團の首長が自然現象を支配する魔術的な力をもつといふ觀念は、今日でもいはゆる未開民族の間に屢々見られるといふ。キリスト教の支配した西洋の中世では、帝王の權威はキリスト教より興へられたものであつた。皇帝神聖の思想はローマ帝國にも存してゐた。天子や帝王の權威には常に宗教的權威の意義が存してゐるのである。たとへ政治と祭祀とが分かれ、政治が直接な宗教性を失ひ、純粹な理性に依據するものとせられるに至つても、なほその根本で宗教性を完全に失つてしまふといふことはない。文化の發展と共に政治の權威は宗教的なものから倫理的なものへ推移すると考へられる。けれどもこの場合にも宗教的權威が素朴な宗教的・祭祀的性格を失つて理性的・倫理的な性格に轉じたのであつて、その理性的倫理性になほ他からは基礎づけられない神聖性が存してゐることを我々は注意しなければならぬ。理性のもつ神聖性は理性によつて純化精練せられた宗教的超越性である。理性は言はゞ人間性に潜む神聖である。神話が原初人の哲學ならば、理性哲學は文化人の宗教である。支那の天命は合理性を要求しながら、なほその根柢に宗教的神聖を有してゐる。ギリシヤのイデアやローマの自然法にも、これと同様な意味で神聖な權威の意義が存してゐる。近代國家の構成原理となつた自然法にも、なほ同様な神聖性が存してゐる。たとへこの自然法が全く世俗化せられるに至つても、法の妥當性の根柢には合理的に基礎づけ得ない信念が存してをり、民の聲には神聖な意義があると認められるのである。他を證明して他からは證明されない根本原理は、端的に明證せられるより外ないものである。理性の普遍妥當性の要求は理性ともいふのに固有な

要求であり、理性の體得承認と共に體得明證せられるものであつて、何か合理的に論證したり證明したりできるものではない。倫理や文化の基礎原理となる理性には、同時に人間性や論證性を越えた超越的神聖の性格が内在してゐる。このやうな意味で、政治には常に宗教性が結合してゐるのであつて、單に純粹な政治といふ如きものは理論的觀念の世界以外には存しないのである。

政治はこのやうに一方で宗教から規定せられ、根柢に宗教性をもつ倫理や文化から規定せられるのであるが、他方では宗教の興廢も組織も、文化の發展も頽廢も、倫理の伸張も墮落も、政治の力に依存することが多いのである。法律の權威さへ實際には國家によつて維持せられる。西洋中世の教會は現世的な政治に對する宗教の優位を信條として成立しながら、實は政治性を内在することによつて成立した地上的な教團組織であつた。それ故、法王はよく帝王と對立して争ひさへした。このやうな現象は超越神論的心情に立脚するキリスト教世界の特有な現象であるが、宗教と政治との何らかの仕方に於ける聯關は隨所に見出される現象である。我が國に於て宗教と政治との統一は、端的な祭政の直接同一態は失はれても、その都度何らかの形で維持せられ、大日本神國の觀念は失はれることがなかつた、佛教が鎮護國家の意義を有するものとせられ、國家が蓮華藏の佛國土に化せられようとしたのも、畢竟このやうな觀念の發現であつたと思はれる。文化も端的に純粹な文化として成立することはないのであつて、その發端に宗教的乃至祭儀的な意義をもつことは今日一般に認められる如くである。經濟活動さへ決して宗教に無關係のものではないのであつて、古代的な形態や原始的な形態の如きは不問に附しても、近代資本主義の發端にさへなほプロテスタンティズムの宗教的・倫理的精神が參與したと見られるのである。近代の經濟學が政治經濟學とか國民經濟學とか稱せられる

のも、經濟の組織に國家の政治や國民の意志が内在することを現すものに外ならない。

右に述べたやうに、現實の歴史的世界に於ては政治・宗教・文化・倫理・經濟等は内面的に結びついてをり、その何れをとつてみても必ず他を含んで成立してゐる。換言すれば、歴史を動かす諸勢力は自他互に媒介關係をなして現存するのであつて、互に相即相入せる統一的聯關を構成してゐるのである。理論的立場からはそれぞれ純粹な形態に於て非歴史的に考察せられる諸勢力は、現實の歴史的世界に於ては無盡に相即相入してゐる。この點から見れば、我が諸勢力の何れかの觀點に立つて統一的考察を進めるとき、歴史を或は政治の相の下に、或は文化の相の下に見ることも可能であり、或は宗教の相の下に、或は經濟の相の下に見ることも共に可能である。併しそのことはこれらの歴史を動かす諸勢力が、相即相入せる相互縁成の關係にあるのではなく、一が基礎階層をなして他を一方的に規定するといふやうな關係にあるのではないことを深く注意しなければならぬ。前に時代區分の問題に際して明かにして置いたやうに、互に他から區別せられる一つの時代を構成するものも、政治的・經濟的・社會的な勢力の特殊な結合であつて、そこには更に主體的な宗教的・倫理的な勢力、即ち精神力が參與してゐるのである。併しこれらの歴史を動かす諸勢力が相即相入せる統一聯關を構成してゐるといふことは、それらが全く無差別のまゝに融合してゐるといふやうなことを意味するのではないことは勿論である。全く無差別の境に統一も聯關もあり得ないことは明かである。歴史を動かす諸勢力は互に他から導き出し得ない根源性をもつてゐる。純粹概念に捉へられるやうな獨自な本質をもつてゐる。たゞそれらが純粹概念の意味するやうに存在するのではないのであつて、それぞれ固有の本質をもちながらも歴史的世界に於ては統一聯關を成してのみ現存するのである。理想類型として純粹概念に捉へられるやうな傾向その

ものが、實は統一聯關を成してゐる歴史的現實そのものの中に潜んでゐる。換言すれば、歴史的諸勢力は相互に分離し分化して、各自が自己の純粹固有な本性を實現しようとする傾向を含んでゐる。即ち相互否定性の傾向を本來的に含んでゐる。宗教は地上的・現世的な政治や文化や經濟を否定的に超越しようとする。政治は政治として宗教や文化や經濟を離れた固有の領域を形成しようとし、文化は文化として宗教や政治や經濟より獨立した自律性を獲得しようとし、經濟は經濟として宗教も政治も文化も排した自己の世界を獲得しようとする。歴史を動かす諸勢力の統一聯關は相互否定性をもつて維持せられる統一聯關である。對立の緊張を孕んだ綜合である。歴史の動搖性の根拠はまさしくこゝにある。歴史的世界の崩壞や變形・變質・變化の動因もこゝにある。緊張を孕みつゝ統一が維持せられてゐるときは、そこに一定の獨自な様式をもつ時代があり歴史的な世界がある。そしてこの統一が喪失して聯關が崩壞するとき、こゝに諸勢力の單なる散在や對立となり、時代を形成する指導理念が消えて、歴史的な世界は他の時代へと推移するのである。

時代區分の成立する根拠は、政治的・經濟的・社會的・精神的な統一聯關に獨自な様式が存するといふところにあつた。この様式の獨自性とは歴史的諸勢力の統一聯關の特殊性を意味するものに外ならないのである。各時代にはそれぞれ特有な課題と、それに應ずる特有な解決といふものが存するものであつた。その場合、課題といふものは歴史的諸勢力間の統一性が失はれ、内面外面に互つて矛盾葛藤が顯現するところに發生するのである。従つて課題の解決といふものは、歴史的諸勢力間に獨自な統一性が建設せられることに外ならない。歴史的諸勢力がそれぞれ固有な本質を發揮して互に分離して行くことは、歴史的勢力の本然に屬することではあるが、あくまで過程の意義をもつもの

であつて、決して目標といふ到達點の意義を有するものではない。文化が細分化して行くことは文化の發展であつても、文化の向上でもなく文化の完成でもない。文化の完成は常に新たな綜合的統一にある。同様に、歴史的諸勢力間に新たな統一聯關を建設することが、歴史的世界のもつ完成への本然的衝動であつて、こゝに課題に對する解決といふ崇高な努力が存するのである。そしてこの新たな統一聯關に他と異なる獨自な中心・周邊の構造が作られるのである。

課題は歴史的諸勢力の根源的紐帶たる時代の指導理念の喪失に發生する。それ故、課題の解決を擔當する力は既成の文化理念の中ではなくて政治力の中に存する。こゝに一時代の中に既に文化と政治との優位の交替が見られるであらう。併し課題解決の力たる政治は、單に盲目的な權力でないのは勿論、新たな文化理念を孕む政治力、即ち精神的な精力を藏する政治力である。同様に、新たな文化理念は政治と共に生育し、政治力を内部より指導する新鮮な健康な生命力に根ざしたものでなければならぬ。即ち、課題解決の力をもつ政治力は、新たな文化理念と健康な倫理的な生活力に於て結合せる政治力でなければならぬ。文化と政治との乖離そのものが文化の頹落であり政治の去勢化である。課題はこゝから發生する。時代の轉換を擔當し得る力は、健康な倫理感であり、新鮮な生命力である。ランケのいはゆる *Moralische Energie* とはこのやうなものを意味するのでなければならぬ。

相互に無盡に媒介し合ひ、相即相入してゐる歴史的諸勢力の間にも、右に述べたやうに、時代によつてその中心となるものに相違があり、その統一聯關の性格に個性差が存するのである。これと同一の事情は歴史的世界にも見出される。こゝに歴史的世界の個性が成立するのである。一つの時代は一つの歴史的世界の構造をもつ。我々が地中海世界の古代や西洋の中世・近世に就いて語るのも、或はイスラムの世界や支那・東亞の世界に就いて語るのも、更に今

日近代世界と異なる現代世界に就いて語るのも、要するにそこに歴史的諸勢力間の聯關の仕方に特有な個性が存するからである。私はこの點を具象的に明かにすることが、世界史學の一つの重要な課題をなすと思ふのである。

このやうに、政治・文化・經濟・宗教等の歴史を動かす諸勢力は、互に結合してのみ現存し、従つて純粹な政治的世界・文化的世界・經濟的世界・宗教的世界とかは現存しないのであるが、今、歴史的世界の構造を明かにするために純粹な世界を構想してみると、それは如何なる姿の世界となり、それに對して現實の歴史的世界は如何なる特異性を示してくるであらうか。そして歴史的世界の動搖や建設といふものは、如何なるところから成立すると考へられるのであらうか。既に宗教に關しては少しく考察を加へたので、次に政治・經濟・文化に就いて考察を加へてみようと思ふ。

(未完)